

バトン

## いづくの先にあるもの

4年 M・Nさん

友達になりたいと思っている人と話すことのためにめらったり、親しいけれど何をなせばいいのか分からずじまってしまう。そんなことが私にもある。だからこの本に出てくる人達の気持ちが私にも分かるような気がした。誤解されたくないから言葉を選びすぎて、話すタイミングを失ってしまうのだ。

私の友達に読書が好きで女の子がいる。その子は読書が好きで、本ばかり読んでいるうちに誰からも声をかけられなくなり、友達が一人もいなくなったと言った。私はおどろいた。その子と私は友達だと私は思っていたのに、その子は「ひとりぼっちでこどくだ」と感じていたからだ。

学校が休みの休日や夏休み、その子とは何度も遊んだ。その子と同じで私も本を読むのが好きだけれど、一緒に遊ぶ時は大好きな本を二人とも読まない。なわとびをしたり、ひみつ基地を作って遊んでいる。その時、その子は学校にいる時よりもよく笑って活発だ。

この本に出て来る人達も、それぞれのことくをかかえていた。そして読み終わった後、私はうれしかった。みんながっているけれどそのちがいを認め合っているから。みんなちがって良い。ちがうところがすてきだ。

私は友達が多いけれど、ふと「さみしい」と感じることもある。自分でも理解できない気持ちに急に不安になる。これが「こどく」なのだろうか。不安をあせる気持ちの中で、私はいろいろなことを考える。もしかしたらこどくは、こどくだと思っ自分と向き合うことなのかもしれない。今度、その子に会ったら言おう。こどくだと感じる時間も自分の大切な一部なのだと。こどくを乗り越えた人は心が強い。自分を知ることと人のちがいを認めて、それを愛せる強さを持っているから。こどくは敵ではなかった。こどくも友達だ。